

平成30年度 皇學館中学校 入学試験問題（A日程）

国 語

問題用紙は七枚あり、問題は「一」から「三」まであります。

国語（その1）

注意

… 字数を指示している問題は、すべて句読点を含みます。

〔1〕 次の文章を読んであとの問いに答えなさい。（ただし、出題の都合上、文章中の表現を改変した部分があります。）

これは象徴的な場合だが、東日本出身の筆者からすると、関西では「ありがとう」という言葉を発する機会が一般的に多いように見える。例えば飲食店で食事をしたとする。注文の品が運ばれてくると「ありがとう」と言う。食事が終わりとレイを下げに来た店員にも「ありがとう」。レジで代金を支払い、お釣りを返されたときも、もちろん「ありがとう」である。また、バスを降りるときに運転手に「ありがとう」は当然であり、電車の中で車掌に見せた切符を返されたときでさえ「ありがとう」である。これらは学生に聞いたり、筆者が観察したりしたものだ。が、たしかに関西の「ありがとう」の頻度は高い。

こうした「ありがとう」の使い方について、地域差を端的に示す地図がある。図1を見てほしい。ここでは店を出るときに「ありがとう」と言う人の割合を都道府県別に示している。これを見ると、「ありがとう」の使用に西高東低の顕著な差が現れていることがわかる。

店の品物を買ってあげたのに、なぜ客のこちらがお礼を言わなければならないのか。筆者などは、そう考えてしまいがちである。相手との関係を判断し、立場上お礼を言う必要のない場合には「ありがとう」とは言わない、というのが東日本の考え方であろう。一方、西日本の場合には、立場はどうであれ、そこで何かしてもらっていることに対して「ありがとう」と感謝する。（ I ） 東日本と、その場の行為を重視する西日本との違いと言ってよいかもしれない。

もつとも、西日本の「ありがとう」を「感謝」の表明と受け取ってよいかについては、もう少し考えてみなければならぬ。もちろん、文字通りお礼の意味で「ありがとう」を使う場合もあるだろう。 X 、これだけ頻繁にさまざまな場面で使用される様子を見ると、この「ありがとう」は感謝というよりも「気遣い」を表しているのではないかと思われる。日々の生活の中で、積極的に相手への気遣いや「配慮を言葉にして示す、そうした発想の象徴的な存在として、「ありがとう」の使用を理解することができそうである。

少し話題を変えてみよう。みなさんは猫をこちらに呼び寄せるとき、どんな声を発するだろうか。猫嫌いの人はともかく、経験のある人は考えてみてほしい。おそらく、「チャッチャツ」と舌打ちをしたり、「ニャーニャー」と鳴き、真似をしたり、あるいは「タマ、タマー」と名前を呼んだり、いくつかの方法が思い浮かぶ。

こうした点について全国調査をしたところ、以上のほかに、「コイ」とか「オイデ」とかいった命令的な言い方も回答された。これらは人間に話しかけると同じ言い方である。つまり、言葉の上では猫を人間並みに扱っていることになる。「タマ、タマー」と名前を呼ぶのもこれに準ずるものではあるが、「コイ」「オイデ」の方が、猫が言葉を理解するののごとく相手の行動を促すという点で、いかにも人間らしい扱いの表現と言えよう。

実際、「コイ」「オイデ」といった命令表現を使うのはどの地域か。図2を見てみよう。そこには、一緒に調べた鶏と犬の場合も併せて載せておいた。これを見ると、鶏に対しては「コイ」「オイデ」と言う地域はほとんどない。反対に、犬に対しては全国的に命令表現をする。両者は対極的だが、その中間的な位置にいるのが猫である。つまり、猫の場合も「コイ」「オイデ」は広範囲に見られるものの、犬に比べて分布が薄い。かつ、日本の両端に当たる東北・北関東と九州東部・沖縄では、あまり使用しない。これは、日本の中央部では、（ ） が、周辺部では、ほとんど命令表現を用いず動物扱いする、というふうに解釈される。

さて、気遣いという点で注目されるのは「オイデ」を使う地域である。この「オイデ」は、目下に対して用いる点では「コイ」と同じだが、相手にやさしく語りかける点で「コイ」に比べて配慮を含んだ言い方である。 Y 、同じ動物に対して話しかける場合でも、「コイ」より「オイデ」の方が気遣いの度合いが高い。

表3 「オイデ」の使用状況

	鶏	猫	犬
東日本	×	×	×
西日本	×	△	○
近畿	×	○	◎

この「オイデ」の使用状況を図2をもとに整理すると表3のようになる（記号は◎▽○△の順に優勢）。まず、使用地域の広さは犬▽猫▽鶏の順である。これは、「コイ」の使用も含めて、これらの動物をどの程度人間扱いしているかという違いを反映したものと考えられる。また、地域差の面では、東日本では「オイデ」を（ ） III が、西日本ではある程度用いている。とりわけ、近畿を中心とした地域では（ ） IV 。これは、東日本より西日本の方が、さらに、西日本の中でも近畿を中心とする地域が、犬や猫に対して気遣いを言葉で表現しやすいことを物語る。

犬・猫にも気遣い、と言うと、違和感^Dがあるかもしれない。しかし、少なくとも言葉の上ではそうした傾向を示す地域が存在する。動物にも気配りをするくらいだから、[※]いわんや人間をやである。^②近畿が配慮を表現することとび抜けて敏感な地域であることは、こうした事例からもうかがえる。

(小林隆・澤村美幸『ものの言いかた西東』より)

〈注〉 ※ 頻度^{ひんど}：度合い。

※ 顕著^{けんちや}：きわだつて目につき、明らかさま。

※ いわんや^いをやである…まして^しであれば、なおさらである。

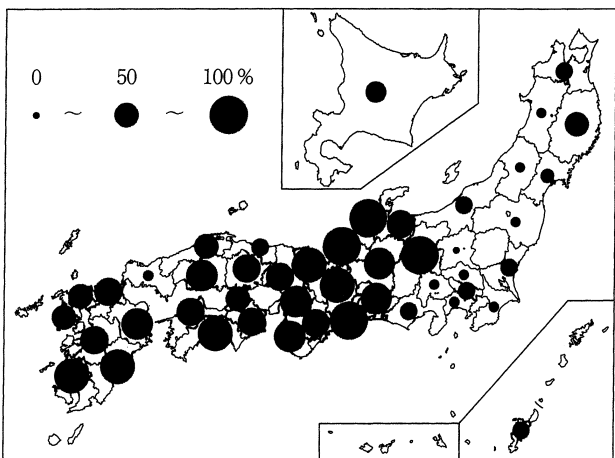


図1 店を出るときに「ありがとう」と言う人

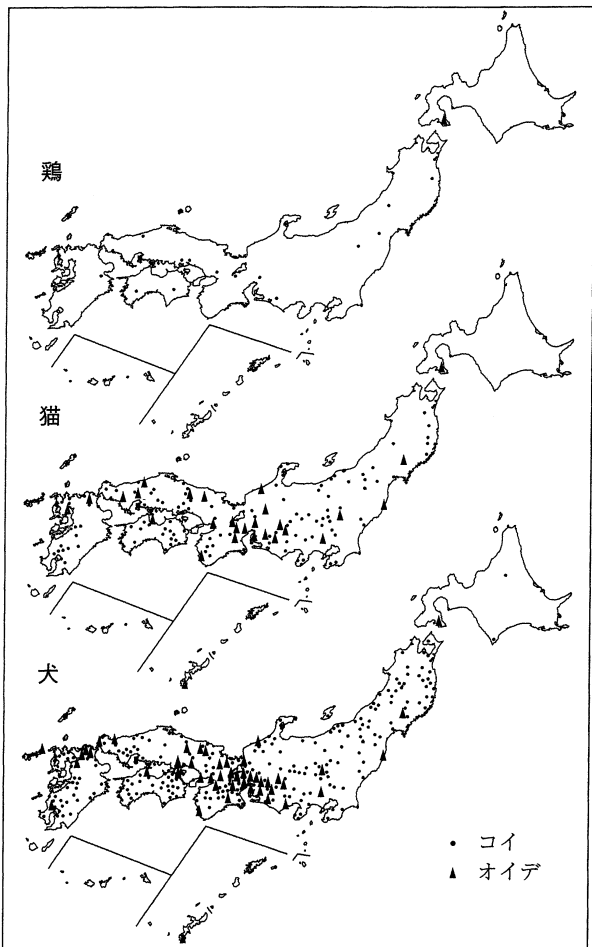


図2 動物を呼ぶ声——「コイ」と「オイデ」

問1 ——部A～Dの漢字のよみをそれぞれひらがなで答えなさい。

問2 ——部①「そう」とは、具体的にはどのようなことですか。次の文の空欄(a)、(b)にあてはまるように、それぞれ本文中の表現を使って書きなさい。

店の品物を買ってあげたのだから、(a) (のこちらがお礼を) (b) (とを考えてしまいがちだということ。

問3 [X]、[Y]に最も適する言葉を次のア～オからそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

- ア なぜなら
- イ つまり
- ウ ところで
- エ しかし
- オ かつ

問4 (I)に最も適する表現を次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 人物より品物を重視する
- イ 感謝の気持ちをこぼむ
- ウ 地位や立場で判断する
- エ 家族のように接することを好む

国語 (その三)

問5 (Ⅱ) に最も適する表現を次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 猫に向かって命令表現を使い人間並みに扱う
- イ 猫にあまり関心を持たず命令などもしない
- ウ 猫に対して命令して言うことを聞かせようとする
- エ 猫を人間とは異なる動物として特別扱いする

問6 空欄(Ⅲ)、(Ⅳ)に入れるのに適切な表現を、本文中の語句を使い、それぞれ十字程度で答えなさい。

問7 —部②「近畿が配慮を表現することにとび抜けて敏感な地域であることは、こうした事例からもうかがえる」とあるが、あなたは身のまわりにおける「言葉づかい」についてどのように考えますか。筆者の考えをふまえ、具体的な例を含めて四十字以上、五十字以内で書きなさい。

〔二〕次の文章を読んであとの問いに答えなさい。

学校はたのしかった。自分がきちんと学校に通って、授業に参加しているんだというあたりまえのことを誇らしく思った。もちろんそれは、押野のおかげだった。なにしろ、去年までは一日のうちにクラスメイトのだれとも話さなかったときだって少なからずあったのだから。

飼育委員になって、「しまった」と思ったのは、教室で飼う生き物を決めなくてはならないからで、それが今回の学級会の議題だった。

飼育委員は四人いて、ぼく以外は女子一人に男子が二人。女子は亀山さんというちょっと変わった女の子で、自分の名前になんでどうしても亀を飼いたいらしい。あとの二人は、ぼくとはまたちがった感じのおとなしい男子でもとて仲がいい。二人でいつも一緒にいる。見た目も、髪型やメガネの感じがよく似ている。

昨日、飼育委員四人を集めて、「事前に飼育委員で相談しておくように」と、椎野先生しいのが言ったというのに、だれ一人として相談をしようという気配がない。ぼく以外の二人の男子は、なにやらひそひそと話しているみたいだけど。

彼らに任せておけばいいか、とぼくはちょっとだけ思った。でも、ほとんどの部分では、ちゃんと決めておかなくちゃ、とあせっていた。だって、椎野先生と押野に迷惑がかかってしまうから。でも、(1) 言い出せなかった。だれかが声をかけてくれればいいのになと思いつながら、ぼくは待っていた。今までは、ぼくが行動に移す前には、すべてのことがきちんと決まっていた、ぼくはそれに従うだけでよかった。けれど、今回のメンバーは期待できそうになかった。

なんとなく彼らの視線を感じる。でも、こっちから声をかけることができない。亀山さんに何度も視線を送っているけど、絶対気付いているはずなのに無視している。どうしよう。学級会は五時間目だから、それまでになんとかしなくちゃいけない。頭の中で、もやもやと考えているうちに時間は(2) 過ぎてゆき、あつという間に昼休みになってしまった。

「ねえ、ちょっと!」

突然亀山さんに声をかけられた。

「亀に決めたから!」

「……え、亀? 亀だけ?」

「そう。亀にだっているいろんな種類がいるんだから、いいでしょ!」

そんな……、と思ったけど、反論のしようがなかった。

「あ、あとの二人は?」

「よくわかんない。えだいちから聞いておいてよ。みんなちっとも決めないんだから。とりあえず亀で決まりだから!」

時間は刻一刻と迫っている。振り返って二人を見ると、ぼくのことをじいっと見ている。ぼくは仕方なく、彼らのところへ

行った。

「亀山さんが、亀って言ってるけど、それで決まりでいいのかな」

二人は顔を見合わせるだけで、何も答えない。

「どう？」

何度目かの同じ質問に、

「家で熱帯魚とか (3) 飼っているから、べつにそんなのなんでもいい」

と片方が言った。そして二人が目配せしあって、ふんつと鼻で笑った。

「べつになんでもいい」

もう片方も、同じような調子でそう言った。正直ほくはむかつとした。これじゃあ、亀山さんのほうがよっぽどまだ。

「わかったよ」

ほくは二人に背を向けた。眉間や耳のあたりが熱くなって、こめかみが (4) した。いいかげんすぎるじゃないかと思っ
た。二人がにやにや笑ったりしていやな感じだ。怒るとい感情を、ほくはこの日はじめて経験したのかもしれない。

五時間目はすぐにやってきて、学級会がはじまった。そして、椎野先生が、

「まず飼育委員の人たちが決めたものを発表してください」と言った。

ちらつとあの二人を見ると、下を向いている。ほくはまたむかつきたけど、^A深呼吸をしたらだいぶ収まった。亀山さん
に目をやると、すましたままだ。だれも発表する気がないらしい。

「ほら、飼育委員！」

椎野先生にパンツと手を叩かれて、ほくは思わず立ち上がった。立った自分にびっくりした。クラスメイトのみんなもびっ
くりしていたにちがいない。五年生になって、押野にからかわれたりして、多少はみんなから注目を浴びることもあったけど、
それは本当に時々って感じで、ふだんのほくは相変わらずのさえない男子だったから。

「はい、じゃあ、枝田くん発表してください」

椎野先生はいつもの笑顔にさらにうれしさが加わったような顔をしていた。やさしい親戚のおばさんみたいで、ほくは
ちよつとだけ心強く思った。

「ほくたち飼育委員が決めた、クラスで飼う生き物の候補を発表します」

ほくはみんなの方を向いて、^Bひと呼吸したあと大きな声で言った。

「ひとつめは亀です。亀といってもいろいろな種類の亀がいますが、飼いやすいのはミドリガメやゼニガメだと思います。小
さくてとてもかわいいです」

言葉は (5) と出てきた。

「それと、ほくの意見ですが、グッピーやネオンテトラなどの熱帯魚を飼いたいと思います。赤ちゃんを産ませて育てたいか
らです。あと淡水魚だったら、あやめ川でつれる鮎とかハヤもいいと思います」

教室がしんとなった。^①自分でも驚いた。こんなふうに分の意見を、頭の中で思っていたとおりに、みんなの前でしゃべ
ることができると。ほくは、^C大きく息を吐いてからしずかに席に座った。母さんが買ってくれた水辺の生き物図鑑と熱
帯魚図鑑はほくの愛読書だ。

「おいおい、なんだよ。すげーな、今日のえだいち」

押野がおどけて沈黙を破ったと同時に、空気がはじけてみんなが笑った。椎野先生はまっすぐにほくを見ていた。亀山さん
のほうを見たら、ピースで返してくれた。

学級会では、その後いろいろ意見が出たけど、五年二組で飼育するのは、結局グッピーとなった。ほくはうれしかったけ
ど、亀山さんには申し訳ないような気がした。

「ごめんね。亀飼えなくて」

あとで亀山さんに謝ったら、亀山さんは「気にしないで」と言ってくれた。

「私、グッピーも好きだから。いっぱい増やしたいよね」と。ほくは大きくうなずいた。

ぼくたち飼育委員は、椎野先生と一緒に近所の熱帯魚屋さんに行って、グッピーをつがいで六匹買った。本物のグッピーは、図鑑で見るよりももっともときれいで、思ったよりも小さかった。

水槽をきれいに洗って、酸素ポンプを取りつけた。学級会のときはちょっとむかついたけど、家で熱帯魚を飼っているという二人だけあって、手際よく準備してくれた。ぼくはお礼を言った。二人も「ありがとう」と言ってくれた。^② さつき怒っていた自分がはにかしくなった。

四人で、これからの飼育日誌のつけ方や、エサのやり方を相談した。三丁目の空き地で野球をする連中とはまた違った感覚で、友達には X と漠然ぼくぜんと思った。

五月末の遠足では、くじ引きで決めた班で行動した。押野とも飼育委員の連中とも同じ班ではなかったけど、リュックを背負ったの山歩きはたのしかった。椎野先生に見つかり怒られるまで、ぼくたちの班ではジャンケンをして負けた人が、勝った人の荷物を持つというゲームをして歩いた。このときのぼくにはジャンケンの神様がついていたのか、一回も負けることなくかなりの距離を楽できた。

「転倒したらどうするの！ 山道は危険なんだから絶対にやめなさい。両手をきちんとあけておかないとだめよ」

椎野先生は山登りが趣味だということで、子どもが登れるような山でも完全装備だった。いつものふくらはぎまでのずんぐりしたスカートをはいているときよりも、もっとずっと若く見えた。

「先生、その帽子似合ってるよ」

黄色い羽のついている帽子を見て、班のだれかが言った。

^③ 五年生になって、押野をきっかけに、ぼくは自分でも変わったと思う。今までに知らなかったことが、いきなりたくさんあふれ出てきて、ぼくはそれらを急速に吸収した。野球、友達、飼育委員、抹茶プリン、怒ること、笑うこと。母さんとぼくの二人だけの世界から、景色はみるみる広がっていった。

(椰月美智子『しずかな日々』より)

問1 (1) (5) にあてはまる言葉を次のア～オからそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

- ア どんどん イ じんじん ウ すらすら エ なかなか オ いろいろ

問2 〓部「鼻で笑った」とあるが、「鼻で笑う」を使った文例として最もふさわしいものを次のア～ウから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 図書館で読んだ小説がおもしろかったが、静かで迷惑めいわくがかかるといけないので、廊下に出て鼻で笑った。
 イ 友達のテスト結果を見て、鼻で笑ってしまったことで、口げんかが始まってしまった。
 ウ お笑いのテレビ番組をみているうちにあまりにもおもしろすぎて、鼻で笑い、涙がでてきた。

問3 〓部、A「深呼吸をしたら」・B「ひと呼吸したあと」・C「大きく息を吐いてから」とあるが、これらの行為は「ぼく」にとってどのような効果があるのか説明しなさい。

問4 〓部①「自分でも驚いた」とあるが、その理由を説明しなさい。

問5 〓部②「さつき怒っていた自分がはにかしくなった」とあるが、その理由を説明しなさい。

国語(その七)

問5 次の①～③について、身体の一部を表す漢字一字をそれぞれ書き入れ、慣用句を完成させなさい。

- ① () が早い(情報を得るのが早いこと)
- ② () に汗をにぎる(はらはらしているさま)
- ③ () を決める(決心すること)

問6 次のア～エのうち、ものの数え方が間違っているものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 新しい手袋を一對買求めた。
- イ 叔母の家には筆筒が二棹ある。
- ウ 夏休みに詩を四編創作した。
- エ 昨夜、湯豆腐を三服食べた。

問7 次のア～エの俳句のうち、季語が他と異なる季節を表すものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 海に出て木枯帰るところなし
- イ いなびかり北よりすれば北を見る
- ウ 啄木鳥や落葉をいそぐ牧の木々
- エ をりとりてはらりとおもきすすきかな

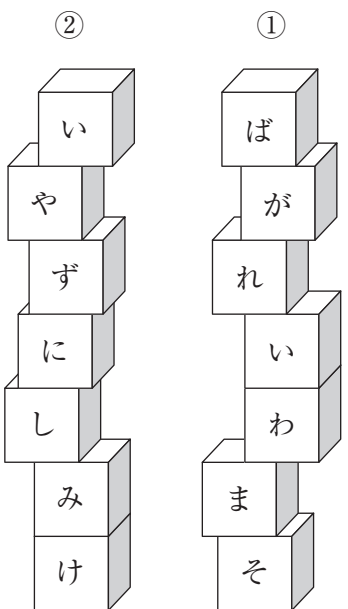
問8 次のア～エのうち、成立した時代が他と異なるものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 『古今和歌集』
- イ 『枕草子』
- ウ 『おくのほそ道』
- エ 『竹取物語』

問9 次のア～エのうち、正しく送りがなを用いているものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 営^{いと}なむ
- イ 承^{うけたまわ}る
- ウ 挑^いどむ
- エ 謝^あやまる

問10 次の①・②のブロックを並べかえてできることわざをそれぞれ答えなさい。



問11 次の語群のスポーツ用語の中から好きな一語を選び、その語を比喻表現として使用した短文を作りなさい。

- (語群) ピンチヒッター
- つばぜり合い
- イエローカード
- がつぷり四つ

